

B 151 山形県にのこる紅花染衣裳について  
山形県立米沢女短大 徳永幾久

目的 昭和57年山形県では東北の時代をアピールするため「紅花の山形路」をキヤッチフレーズにして各種の事業を行つた。その一つに「紅花のすべて展」がある。それに協力し、山形県に残存する紅花染衣裳の収集調査を行つたので、その概況についてのべる。

方法 県内一円における実物収集の結果を比較検討した。

結果 赤色は太陽の色を表すといわれ、力の表徴として衣裳に用いられると同時に、魔除けの色としても子供の衣類や下着に用いられてきた。赤色染料としては紅花、蘇芳、茜などがあるが、医学的意味もあつてか紅花は特に愛好されてきた。かつては山形の民間でも紅木綿などといわれ庶民の間でもいくらかは使われた事もあつたが、大方は乾燥され紅花餅として京都、江戸に送られ、染料の原料とされたが、一部は紅花衣裳に染められ、紅花商人によりもち帰られたのである。現在残存する衣裳は、黒川能、黒森歌舞伎、小倉歌舞伎などの舞台衣裳や、紅花商家の小袖、子供の掛衣裳、帽子、庶民の腰巻、腰掛の褌などにみられる。能衣裳には江戸中期のものがみられるが、歌舞伎衣裳は中期～後期のもの、小袖は後期、掛衣裳も後期、庶民のものは明治期のものとみられ、主に庄内、置賜、村山にみられた。模様は小袖類は一般的に目出度い松竹梅を主体とし、竹を主としたもの、松を主としたもの、梅だけのものもあるが、それに扇子、からたち、牡丹、かくれみのなどの縁起ものが加えられている。中でも興味をもてたのは表が藍、裏が紅の室ね着や、からたちをモチーフにした生命の樹文様の掛衣裳があり、これらは京都にあつたにしても、格式のあるもので、紅花商人の美意識が伺われるものである。